

氏名(本籍)	き たに よう こ 気 谷 陽 子 (石川 県)
学位の種類	博 士 (図書館情報学)
学位記番号	博 甲 第 4139 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	学術情報システムのもとでの学術図書館の収集に関する研究

主 査	筑波大学教授	植 松 貞 夫
副 査	筑波大学教授	永 田 治 樹
副 査	筑波大学教授	中 山 伸 一
副 査	筑波大学教授	小野寺 夏 生
副 査	国立情報学研究所教授	宮 澤 彰

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 1. 目 的

どんなに大規模な図書館でも、顧客が求める学術文献の全てを単独で供給することは困難である。このため、図書館では他の図書館から取り寄せて供給する相互利用サービスが行なわれている。わが国では、1980年の学術審議会答申『今後における学術情報システムの在り方について』で示された学術情報システムのもとに、相互利用システム NACSIS-ILL が構築されている。2002年度の NACSIS-ILL の参加大学数は 615 で、参加率は 89.7%である。また、これを用いた 2003年度の大学による文献複写依頼は 976,151 件で、わが国の大学図書館の文献複写依頼の 81.9%を占めている。このように、学術情報システムは、わが国における学術情報資源の供給のシステムの大きな部分を担っているが、学術情報システムの学術文献の収集は十全なものではなく、その問題の所在は未所蔵図書館の発生にみられる。

本研究は、学術情報システムの、最終利用者である研究者の学術図書需要のうち、どの程度までを学術情報システムで供給できるのか、また、学術情報システムで供給できない学術図書とはどのようなものかを示すことを目的とする。

### 2. 構 成

本研究は (1) 学術情報システムの今日に至る発展の経緯を、①一次情報の収集、②一次情報の提供、③所在情報の形成、④情報検索の窓口の 4 指標群からマクロに捉える (第 2 章)。(2) 学術情報システムに登録してある学術文献の総体を一個の蔵書として捉え、図書館パフォーマンス指標 ISO11620 の要求タイトル所蔵率を用いて、学術情報システムが研究者の求める学術文献をどの程度供給できるかを引用文献調査法により測定する (第 3 章)。(3) 未所蔵図書館の発生要因について、未所蔵図書館の発生を従属変数、出版地、出版者タイプ、出版年、分野を独立変数とするロジスティックモデルを用いて解析し、未所蔵図書館の発生に対し、どの独立変数が、どの程度、どのような影響を及ぼしているかを分析する (第 4 章) ことにより構成されている。

### 3. 結果の概要

第2章：学術情報システムは1980年代に、4指標群とも上昇し、大学図書館の全体として充実が図られた。90年代前半は、所蔵情報の形成が著しく増加したが、学術文献の収集が減少傾向に転じた。90年代後半は、NACSIS-ILLが整備されNACSIS-CATとともに学術文献の収集・提供業務の支援システムとしての機能が発揮され、利用者サービスが向上した。近年は、学術情報システムの諸機能が完成し安定している。

第3章：学術情報システムにおける雑誌の要求タイトル所蔵率は概ね100%であるが、図書の要求タイトル所蔵率は全体で80.5%であった。図書の要求タイトル所蔵率は、1980年代後半以降に僅かながら減少していた。また、社会科学で大量の図書の需要があって図書の要求タイトル所蔵率が低く、図書は雑誌よりも資源共有の効果が高い。

第4章：出版地では、日本<南・北アメリカ諸国・イギリス<欧州（イギリスを除く）<アジア・アフリカ・オセアニア諸国の順に、出版者タイプでは、出版社<民間・学会<政府機関<大学の順に、出版年では、1979年以前で、分野では、人文科学<理学<工学<社会科学<生命科学の順に、未所蔵図書の発生の確率を高める。

これらから、本研究のまとめは、以下の4点に集約できる。

- (1) 年間図書受入冊数の減少が単純に未所蔵図書の発生の確率を高めることに繋がってはいない。2章で1990年代以降の年間図書受入冊数の減少、3章で図書の要求タイトル所蔵が僅かに減少傾向にあることを示した。しかし、4章の分析では1980年以降の推定値が有意ではなく、未所蔵図書が増加しているとはいえないことが示された。このことから、90年代以降、全国の大学図書館では図書の収集が減少傾向にあるが、出版年が90年代以降であることが単純に、未所蔵図書の発生の確率を高めることに繋がってはいないと考えられる。
- (2) 社会科学分野では分野の特殊性が未所蔵図書の確率を高めている。3章で社会科学では特に大量の図書の需要があり、要求タイトル所蔵率が最も低いことを示し、学術情報システムの要求タイトル所蔵率の向上には、社会科学の未所蔵図書の抑制が課題であることを示した。4章では社会科学であることが未所蔵図書の発生の確率を高めていることが確認できた。
- (3) 非売品出版物で未所蔵図書が多く発生している。4章で出版者タイプが大学や政府機関の場合に未所蔵図書の発生の確率を高めていることを明らかにした。大学や政府機関の出版物には、限られた範囲を対象として出版され、価格が設定されていない場合が多いことから、非売品出版物で未所蔵図書が多く発生しているといえる。
- (4) 解説書、技法書などの消耗品出版物で未所蔵図書が発生している。

## 審査の結果の要旨

### 1. 研究の課題設定・社会的意義

情報通信技術の進展に伴って、学術コミュニケーションの中心が、印刷資料から電子資料へと移行してきている。しかし、当面、膨大な印刷資料の蓄積のすべてが電子化されることは考えられず、印刷資料と電子資料が境目なく一体となった学術コミュニケーションの基盤を支えることが学術図書館の新たな役割となっている。

また、国立大学の法人化は、各国立大学附属図書館の教育・研究支援機能の質的向上を促す機会となっている。そのためには、わが国の学術情報資源の供給システムである「学術情報システム」のより一層の高次化により、総体としてのわが国大学図書館の高機能化が求められるが、このような時期に、大学図書館の研究支援機能の根幹となる学術文献の供給に関する本研究がまとめられたことの社会的意義は高いと評価できる。

本研究の問題意識は、大学図書館職員である申請者の実務経験の中から形成されたものであり、問題意識に基づく3段階からなる研究の課題設定は適切であり、従来の研究には類例のない独創性が認められる。

また、学術情報システムの根本理念である資源共有という概念を中心に、蔵書の包括性と有効性など、学術情報システムに関する関連文献の読み込みは十分であり、既存の知見と本研究の新規性ととの明確化も明瞭に展開されている。

## 2. 研究方法の妥当性と精緻さ

学術情報システムの展開状況を考察した第2章では、大学図書館実態調査（文部科学省）の調査項目から4群11項目の指標を選定し、図表化に基づく分析から、1980-83年、84-88年、89-93年、95-98年、99年以降のおよそ5年ごとの5期に分けて、指標の増減傾向が変化するという特徴を見いだしている。とりまく環境の変化と学術情報システムとしての新たな方式・考え方の導入を機軸とするこの5期それぞれの特質についての考察は、説得性が高いものと評価された。

第3章の、筑波大学で1999年に授与された課程博士の学位論文に掲載された引用文献に基づく供給状況の調査分析は、16,000を超える膨大な数のデータを精緻に分析したものであり、信頼性が高い結果を見いだしている。審査では、筑波大学の、課程博士論文、単年度のみデータであることが議論されたが、総合大学として学位論文の内容が概ね各分野を網羅していること、データの量としては十分なものであること、加えて図書館の所蔵リストとの照合など調査技術上の制約などの総合的な判断であることが了承された。

第4章の、学術情報システムにおける未所蔵図書の発生を従属変数、出版地、出版者、出版年、分野を独立変数とするロジスティックモデルを用いた、未所蔵図書の発生状況とその要因に関する調査分析は、本研究が初めて明らかにした事柄で、その手法、得られた結果とも学術的な価値が高いと評価された。

これらの調査分析により、学術情報システムのもとでの学術図書の収集に関する諸側面の課題の探求と検証が適切に行われた。

## 3. 研究の発展性、応用性

本研究により、わが国大学図書館全体としての、未所蔵図書の発生要因とその傾向が明らかになったことにより、個々の大学図書館が蔵書構築計画策定に際し、所属する大学の研究分野・動向に留意しつつ、意を払うべき点が示されたといえる。

今後は、未所蔵図書を多く生み出している社会科学分野の学術文献利用の特殊性をより詳細に調査すること、学術情報システムの総合目録データベースを用いて、学術図書の収集の集中と分散の偏りを明らかにすることなど、本研究で得られた知見を活かした具体化・詳細化、手法の精緻化といった方向での研究の展開が期待される。

なお、第4章部分につき、学術論文として公表することが著者に要請された。

よって、著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。